断想　下又白谷

写真と文　赤沼正史

ひょうたん池からの一尾根周辺の岩場。中央の三つのコブが左から第一支稜、前穂三本槍、正面壁の頭

初めのない始まり

ひとり、東南アジアの密林の中を偶然出会った川に浴って遡ってみた。鈍重な流れをボートで、そして沢というよりは斜面全体を水のしたたる草付壁を攀じ、泥まみれで視界のきかぬ山頂に立って、そのとき下又白谷を想った。イメージや観念にとらわれた暴力的な山登りに嫌気がさしての旅の途上のことだ。それはまた街での過剰な人間関係や、蔓延するイメージファシズム……管理政治体制からの一時の逃亡を企だてての旅でもあった。

だがそこで、ぼくにとっては様々なイメージの交錯する思い入れの地である下又白谷を想ったのはどういうわけか。

※

山登りは仙人の遊びだなんて考えていたことがある。

「書くこと」が「書くこと」自体の拡散を志向せざるを得ないように、「登ること」もその行為の不在の地を目ざさざるを得ない。それは意識や身体という、この居心地の悪い枠組の拡散を求めることでもあるが、そのために東南アジアの自分にとって全く未知の密林を彷徨うことは恰好であるように思えた。

あらゆる関係の断絶した大地を……地表を這いずりまわれば、そこに失なわれた「家」を発見できるのではないかと……。

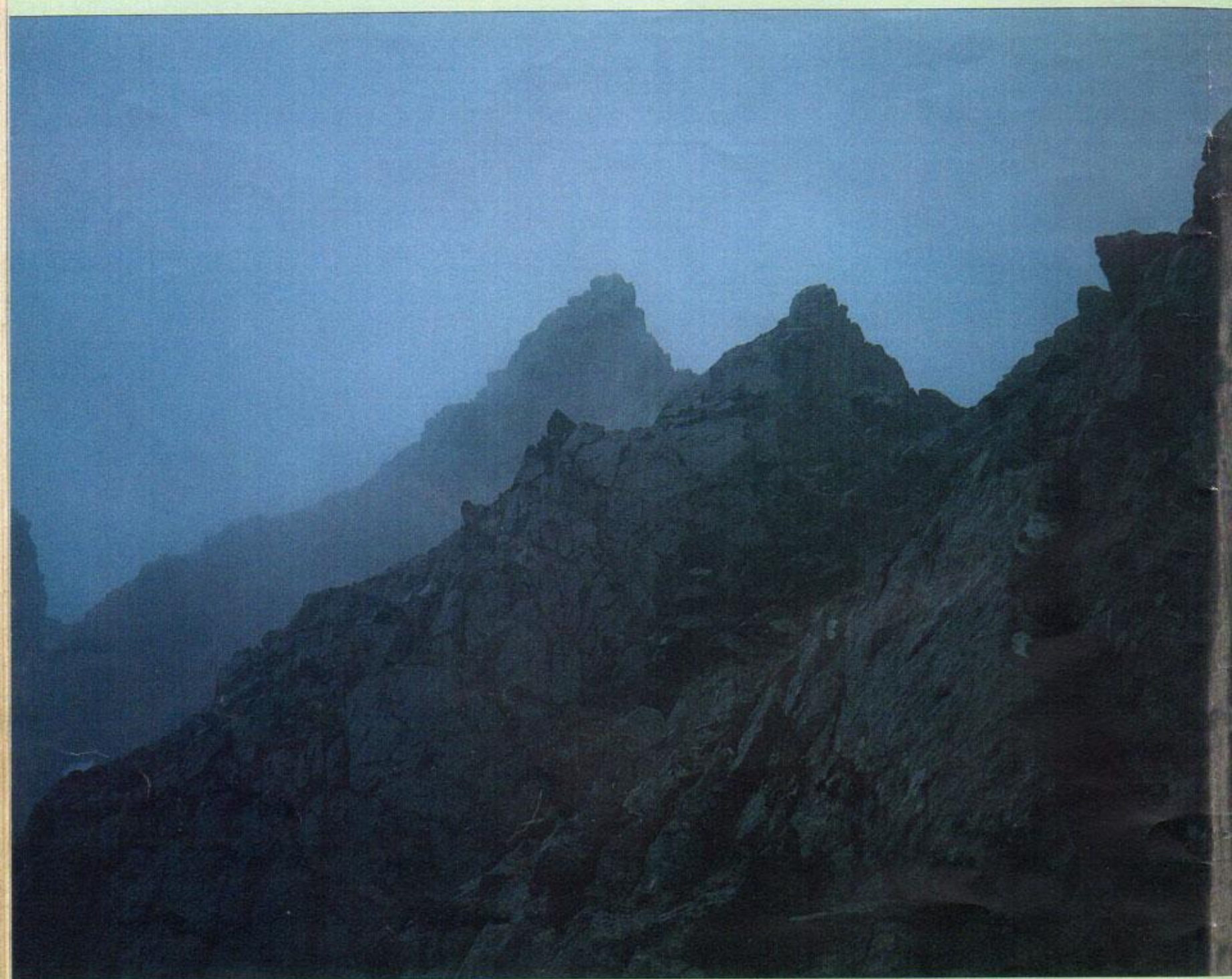
※

だがイメージなき山登りは余りにも寒々しい。そこには青臭い厭世家の匂いが漂う。

もとより山登りは現世の気分を超越した、夢想家によって為されてきたものではなかったか。彼は確かに自分の創ったイメージへと邁進する最中にあって、そこが自分の故郷であったことを知る。彼にとっての「家」は自分のある場所すべてとなる。

※

山に登り、ぼんやり考え、自惚れ、思いあぐねて自分を嫌い、山を呪い、新たなイメー



ウエストンリッジの途中から終了点のピナクルを望む

ジを生み出し、また山に帰る。たとえばこんなサーキットを断やさぬこと。そのサーキットの内容をも批判していくこと。

※

山登りの事実があるイメージの体現としてあるならば、それはある種の表現行為であると言えるだろう。

他者との関係を拒否して、より「ひとりの狂人の風景（イメージ）の現出」である時が、その作品の最も美しく輝く時なのだとしたら、「観客のいない舞台の上」（遠藤甲太筆〝山――陶酔と失墜〟より）での行為である山登りは、その最たるものである。

山登りにおける作品は、ただ歴史としてしか残らないから、物質として残された作品（オブジェ）ほどに観客を冷たく拒絶しない。

素晴しいことには、ぼくらは過去の登山者たちの為した山登りについて、書かれ、語られたものによって、それらの山登りのイメージを好き勝手に作り上げ、それを自分のイメージにとりこむ自由さえ持っている。歴史という事実の否定の上にのみ立てられる、作品創りに加わることのできる喜びをもって、ぼくらは次なる山登りに向かう。

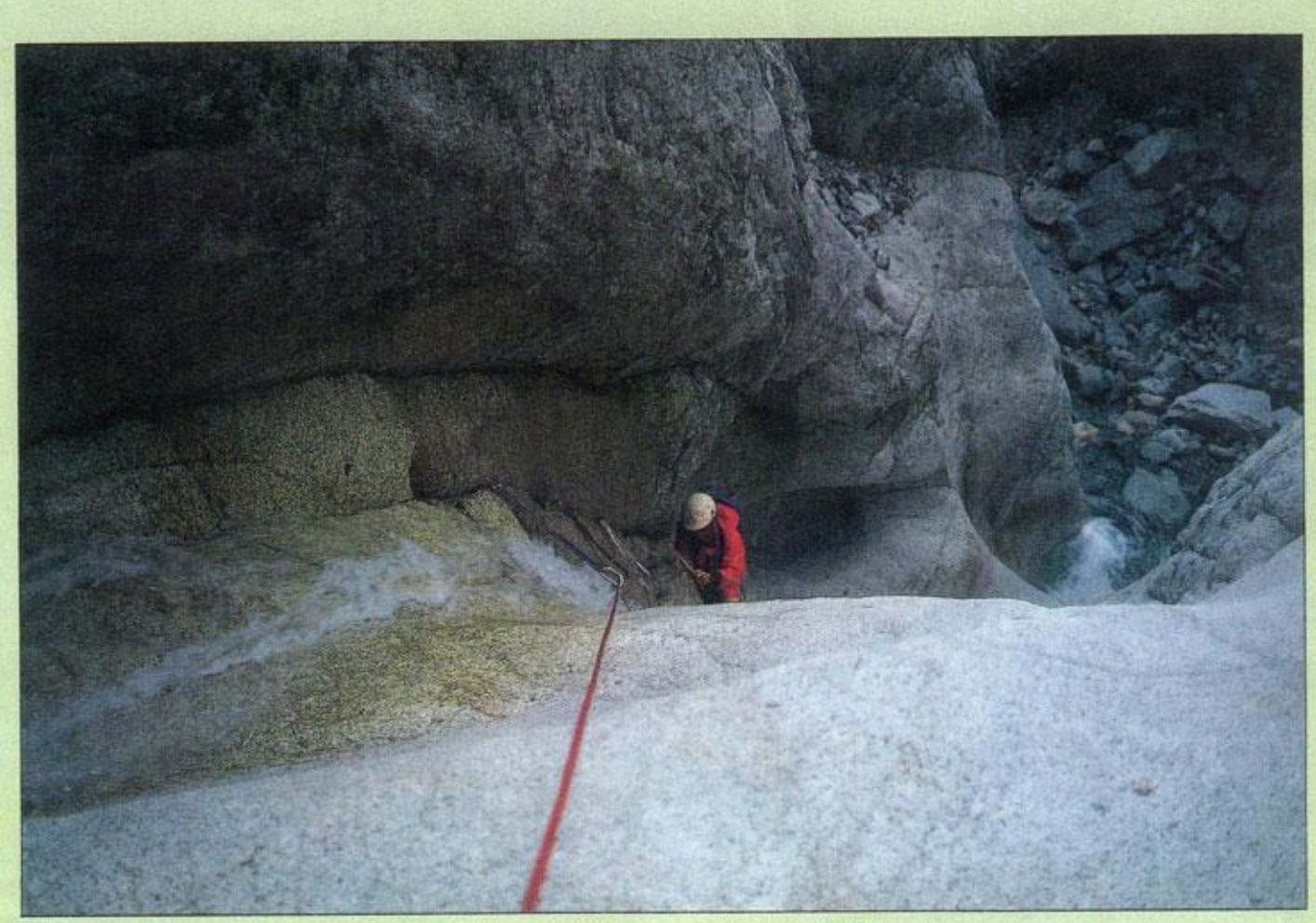
ウエストンリッジ？を登る

久々で履く山靴の重さに苦しみながら、明神岳東稜の鞍部に這い上がると、たしかにひょうたんの形をした汚ない水たまりがある。

相棒の川辺敏子ちゃん（22歳）もへらへらしながら上がって来た。「お風呂の中で朝まで寝ていたことだってあるんだよ」と自慢する彼女の信条は、「のんびりするのがエラい」なので、今回はぼくもつきあってのんびりやることにしよう。

これから登ろうとしている下又白谷の上部は、初雪にずい分と白くなっているのだけれど、横尾山荘の住人でぼくの知己、岩切直氏（24歳）によれば、「登山靴と手袋ぐらいあれ

下又白谷Ｆ２をリードする筆者



下又白谷Ｆ３中段をフォローするわたべゆきお

ば、アイゼンまではいらんだろう」ということだし、天気は今のところ良いし、ぼくらはこのルートのために四日間の休みを用意してきたから、急ぐことはない。

敏子ちゃんはごそごそとお茶をいれようとしている。ぼくは鞍部の上を歩きまわって、茶臼の菱形岩壁を写真に撮ったり、上部のルートを読んだり……ぼくは滅多に風景に感動したりすることはないのだけれど、ここの景観はなかなか見飽きない。下部本谷から前穂三本槍周辺の岩場にまでせり上がる斜面。点在する多くの岩壁や岩峰は、未踏。前穂東南面のリッジがこちらに向かって、ほとんど垂直に立ちはだかって見える。ぼくらの登ろうとしているルートだ。

※

今回のルートは、ウォルター・ウエストンが1893年前穂高岳に登頂した際の故山崎安治氏による推定ルートである。推定の根拠となっているのは、ウエストンの著作『日本アルプス・登山と探検』の記述だ。

「山稜の小さな池」から「大きなクーロワール或はガリー」に下り、雪渓の「雪の上を進むと再び険しい岩にやってきた。そしてここから頂上までが全探検中で一番興味深い場所である。岩は今まで出あったどれよりも険しく固いものだった。それで私達は全力を注がなければならなかった。それだけに登攀は爽快だった。」そのような一連の記述から山崎氏は、「断言はできない」としつつも、この第一尾根の下又白谷側第一支稜とでも言うべき、東南面のリッジを推定したのだ。

この推定ルートに最初に疑問を持ったのは、下又白谷研究の先鞭を担った山岳巡礼倶楽部の会員、わたべゆきお氏（35歳）である。彼は果たして当時のウエストンの技術や装備で、この岩稜を登ることができたろうか、そしてこの岩稜を右岸に見るルンゼでも登れば、容易に山頂に達し得るのに、あえて岩稜を登路に選ぶ理由があっただろうか、といったことを疑問の根拠としていた。

この疑問は、1979年、1980年夏のわたべ氏を中心としたこの周辺の偵察行、そしてとなりの一尾根正面壁中央稜から推定ルートを右岸に見るルンゼへの登攀によって深まる結果となった。当の岩稜を登ってみる機会にはめぐまれずにいた。

ところで、ひょうたん池から下又白谷に下り、その上部を通って前穂山頂に到るルートは、穂高岳登山史の初期にあっては最もポピュラーなルートであったようだ。ウエストン登頂の2週間前には、前穂高岳の初登頂者と言われる館潔彦測量官が、おそらくウエストンと同じルートから登っていることは、ウエストンの前著より推測される。そして、彼らをともに、実質的に導いたのは、名ガイドとして名の通った、猟師の上条嘉門次だった。このルートは何よりも嘉門次の道であった。しかしこの道は、12年後、1905年に鵜殿正雄氏が前穂に登った時の記録ではすでに廃道とされている。彼は現在の岳沢を登るルートを採り、それを表山道としている。

その鵜殿氏が穂高岳から槍ヶ岳への初縦走をした時は、嘉門次を案内として、この旧登路を通っている。そしてこのルートは、まさに下又白谷上部の谷をつめ、前穂高岳～明神岳間のコルに立っているものなのだ。

ウエストンもここを登った可能性はないかという考えが浮かばないでもない。

※

ウエストンはこの池に来る途中で、珍しい黒イチゴや草イチゴを発見したと書いているし、ひょうたん池の命名をした鵜殿氏は、ミヤマカンバ、ミヤマハンノキ、ミヤマナナカマドの生えた土地を抜けて、ベニバナイチゴ、ミヤマナナカマド、ミヤマカンバの小柴を踏んで鞍部につくと、池のまわりにはツガザクラ、偃松の濃い緑があったと書いている。

どうやらこの辺は植物の豊かな地であるらしい。ぼくに見分けられるのは偃松ぐらいのものだけど、たしかに気持の良いところではある。しかし、そろそろ重い腰を上げねばなるまい。お茶やお菓子は充分楽しんだし、もう昼もまわってしまった。

少し東稜を登り、岩場の始まるところからおもむろに下降に移る。下又白谷への下降路はウエストンも、「ほとんど垂直の岩壁をトラヴァース気味に横切って下らねばならない。岩はもろくて不安定だったので、岩の上に垂れている蔓草を手がかりにした」と書いているが、実際相当に嫌なところで、ぼくらは懸垂下降でここを通過した。

長く急なガレを、ときおり発生する自然落石に頬をひくつかせながら登り、目ざす岩稜の取付に着いたのはもう暮れ方。岩稜の末端は急激に切れ落ちた岩壁。これを登らねば落石から安全にビバークできるところも無いので、末端壁の右稜に取付く。傾斜の強いブッシュと露岩を二ピッチ登ったところで、何とか二人で坐れるぐらいの場所を見出す。もっと良いビバーク地はないかともう二ピッチ登るが、見あたらず、薄暗がりの中、ロープを固定しながら降りて、ここでビバークとする。

初めてのビバークだと喜び、はしゃぐ敏子ちゃんを制して、なかば冗談のつもりで、「今はこんなに天気がいいけど、明日はどうなるかわからんのだからね」

夜半から雨が降り出す。しばらくツェルトでウダウダしていても、雨は止みそうにないし、ここまで来た今となっては、このルートを登り切るのが最も近い帰り道のようだ。着るだけ着て、手袋つけて、ピッと行動開始。

ブッシュ、露岩、それにうんざりする偃松登りで、体のシンまで水がしみとおる。寒いので一所懸命登る。偃松を抜けた後は、傾斜が落ちて快適な岩稜となる。岩登りの程度としては滝谷の四尾根ぐらいだけど、やたら長い。稜上にはいくつかの岩塔があって、いちいちそれを越えて行く。右側はスパッと切れ落ちていて……夏の晴れた日に登ったらさぞ気持の良いことだろう。

ガスが晴れて、背後に奥又の池や徳沢が見えてきたが、今度は風が出て、小雪も舞い始めた。

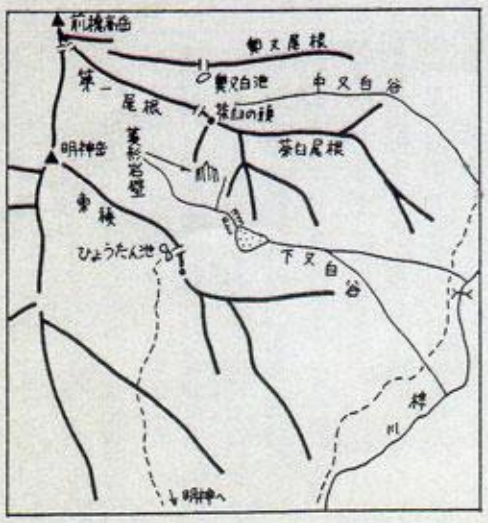
一息にせりあがった尖塔を登りつめると、ルートの終わり。この尖塔は上高地や徳沢からも顕著に望まれるのに、名前がまだない。名前をつけちゃおうと、いくつか案を挙げるが、「下品」だからと敏子ちゃんに却下される。

ここの先はとてもとがっていて、強風の中では上に立つことができず、交代でここに坐って記念撮影する。

※

ウエストンがどこを登ったか、なんて実際ぼくにはどうでもいいことだ。ただ今後の、この地域の登攀への興味を高めるために、推定ルートに対する肯定及び否定の材料をそれぞれに挙げておく。

肯定：ひょうたん池から下又白谷への下降路は困難な岩場を含むものだが、ウエストンはここを素手で下りている。この推定ルートを登るに足る、クライミングの技術を持っていたことは想像できる。ルートの断定は当然、嘉門次によるものだったろう。彼は明神岳から前穂高岳、さらに奥穂高岳から槍ヶ岳にかけて縦横無尽に歩いた実質的な先駆者だったと思う、下又白谷から前穂高岳に到る嘉門次の道だって一本だったとは限らないから、鵜



殿氏とウエストンが同じルートを登ったという根拠はない。

否定：この岩稜は、実際の困難さはともかく、ひょうたん池あたりから見る限り、かなり迫力あるものである。しかも、取付となる末端壁は、それだけで五ピッチを必要とする傾斜の強い壁だ。岩登りを目的とする者でもない限り、あえてここに取付くとは思えない。

ウエストンは著書「The playground of far east」（極東の遊歩場）において、北鎌尾根の上部を登ったと思われる記述を残しているが、彼はそれを「鳳凰山の最終峰の短い時間の険しい登攀に次いで一番むずかしい」と記し、さらにその困難さを熱い調子で綴っている。それに比べるなら、北鎌尾根より難しいと思われるこの岩稜を登ったにしては、前穂登頂の際のウエストンの記述はあっさりしたものに終わっている。

〔メモ〕パートナーは川辺敏子（同人メビウス）。登ったのは1985年10月10～11日。ルートは全17ピッチで3級～5級、最終ピッチあたりに残置ハーケン2、終了点にボルト1を見出した。初登者等一切不明。この辺の概念を正確に記したものはほぼ皆無で、ルート名は不確定。一尾根第一支稜と言うのが、位置関係を表したものとしては正確。わたべ氏はこれを「ウエストンリッジ」と呼んでいる。ぼくらもそう呼んで、これを登った。

ミステリアス・ヴァリー 下又白谷を登る

下又白谷が、地域研究あるいは岩登りの対象としてとらえられ始めたのは、岩稜会編著の『穂高の岩場』刊行のころではないだろうか。ここでは下又白谷が独立したエリアとして紹介されているが、おそらくはその踏査の目的で、同会パーティが下部本谷を、右岸草付帯にそって下降している。1949年7月のことだ。もちろん彼らは、ここを通過した初めてのパーティというわけではなく、初登は1926年7月、すでに東医専の篠井金吾、岩本由明両氏によって行なわれているし、1934年3月には慈医大パーティが奥又の池より積雪を利用して下降している。また、記録は出されていないが、新村正一氏も積雪を使って、単独でここを通過しているらしい。

下又白谷の岩登りは、セオリー通り本谷から始まったと言えよう。

ついでに述べると、黒ビンの壁（別称下又白壁あるいは白又白壁）においても、いくつかの登攀が行なわれた。1947年9月、浪高の佐谷建吉、松丸秀夫、徳丸篤司の三氏によって初登される。翌年八月佐谷氏は別メンバーとルートを一本つけ足す。そして1960年の4月になって芳野満彦、大倉大八両氏によってさらに別ルートから登られる。

ただ厳密には、この壁は茶白尾根の下又白谷側の測壁で、下又白谷の岩場という意識によってよりは、むしろ上高地から近い、目立つ存在として登られたものだろう。

時代の尖鋭的なクライミングが、状況全体の困難よりも、部分的な困難に向かう傾向はこのころからすでにあったようにも思われる。

前記の岩稜会パーティは、下部本谷が大きく三つの滝群からなると報告している。これは、彼らが谷にそって下らなかったために、両岸をゴルジュに囲まれたF2を見逃したのだろうか。

下部本谷が四つの滝群からなっていることは、1962～65年に会を挙げて下又白谷研究を行なった、山岳巡礼倶楽部によって確認された。

彼らは、上部奥壁の初登に次いで、下部本谷F1右岸から明神岳東稜につきあげる灌木のリッジをひょうたん池まで登り、これを山巡稜と名づけた。この稜上からの偵察で、本谷の全貌をつかむことができたのだろう。この時菱形岩壁や菱形右方ルンゼが見出され、「蛇腹の時代物の写真機」で撮影された。

本谷の無雪期初登は、この二か月後、1965年10月に鵬翔山岳会パーティによってなされる。

※

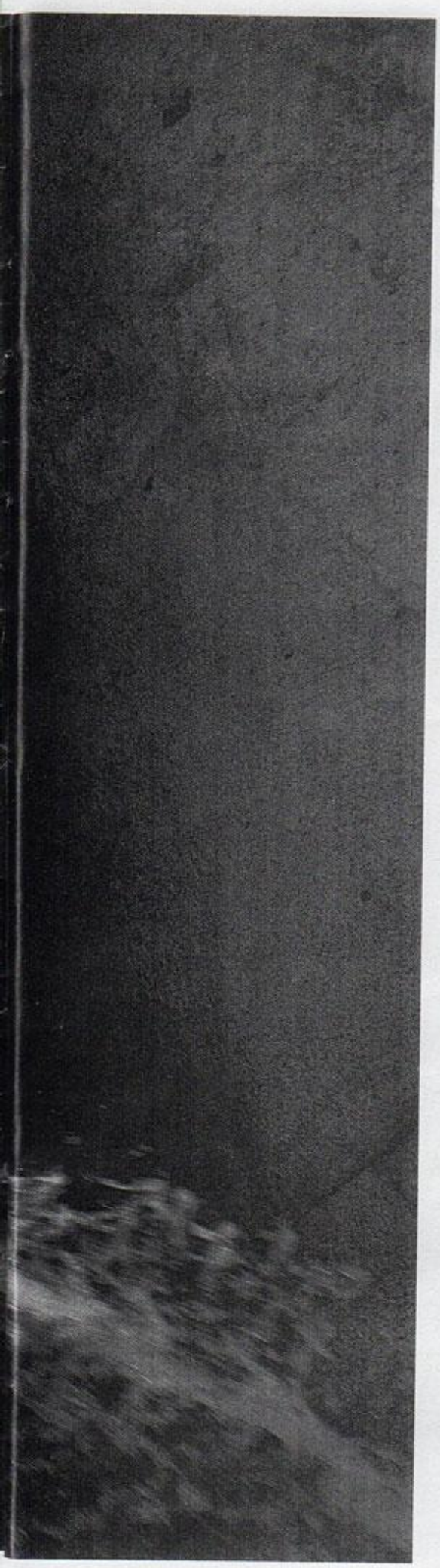
下又白谷の岩場は1980年代に入ってなお、人跡の少ない地域である。ここをわたべ氏は、

「上高地のバスターミナルから最も近い岩場の一つであるにもかかわらず《神秘の谷（ミステリアスヴァリー）》である。屏風や四峰の岩壁に《奇妙な果実（ストレインジフルーツ）》がたわわに実っている時でさえ、この谷にうごめくものは、セクシーな風と猿どもの群れ、それに精神構造にいくらか問題のあるぼくらのような人種しかいない。全く露骨にスケベな空間」

なのだと言う。

「初登攀を一本、子供は二人、男には穂高女には梓と名をつける。残りの人生はビールでも飲んで笑いとばしてみせよう」なんて言ってたわたべ氏と、菱形岩壁の左に展開するスラブ（菱形スラブと命名）を登りに来たのは1980年の夏。水なし、装備不足で壁の中の不安な一夜を過ごし、奥又の池に抜けた時は、池の水を呑みほす自信だってあった。装備不足で不本意なラインから登ったこのスラブを、充分な装備を持ち、大テント一杯分の仲間と納得のいくラインから登り、徳沢のキャンプを引きはらう時は、テントのまわりを空の酒ビンが一周した翌年の夏。

そして、わたべ氏は自分の発言を実行すべく、子づくりの予行演習とビールに忙しく、



たまに電話でささやかれる、「ユマールとジャックダニエル持って下又行きませんか」の甘言にも耳を貸すことがなくなった。

1985年、屏風や四峰の岩場にさえクライマーの姿を見ることは少なくなった。ぼくはついに切り札を出した。本谷がわたべ氏の弱みだということを知っていたのだ。

※

「菱形ルンゼの下でビバークか。雨が降るとことだな」とかぶつくさ言いながら、F2まで降りてくると、山田武氏（24歳）はまだ奮闘中で、夕闇せまる中、徳沢を背景に確保するわたべ氏をぼんやり眺めながら、石の上に腰を下ろして待つ。

今日越えてきたのは、わたべ氏称するところの鉄のF1、銅のF2であって、どちらも結構しぶい登攀を約束してくるところだけれど、ここはさすがに何度も通っているだけにスムーズに抜けられた。

問題はこの先で、ぼくらにとってはまだ未知の、銀のF3、そしてピカピカの金のF4を越えなければならない。F3は今ひとりで見に行って、とても今日中に登れるしろものではないことを確認してきたところだ。

付近の石ころをかたづけて、ルンゼの中心にツェルトを張る。完全に暗くなるには、まだ少々余裕がある。前穂の東面に刻まれた最も傾斜が強く、美しい谷のど真中でのビバーク。山の中にどっぷり首までつかった状態ではじめて、山を想ったり、眺めたりすることに集中できる。

今日一日の登攀や明日のことなんか、もうほとんど頭になくて……ビバークの時はウイスキーが最も旨い酒であることを発見する。

※

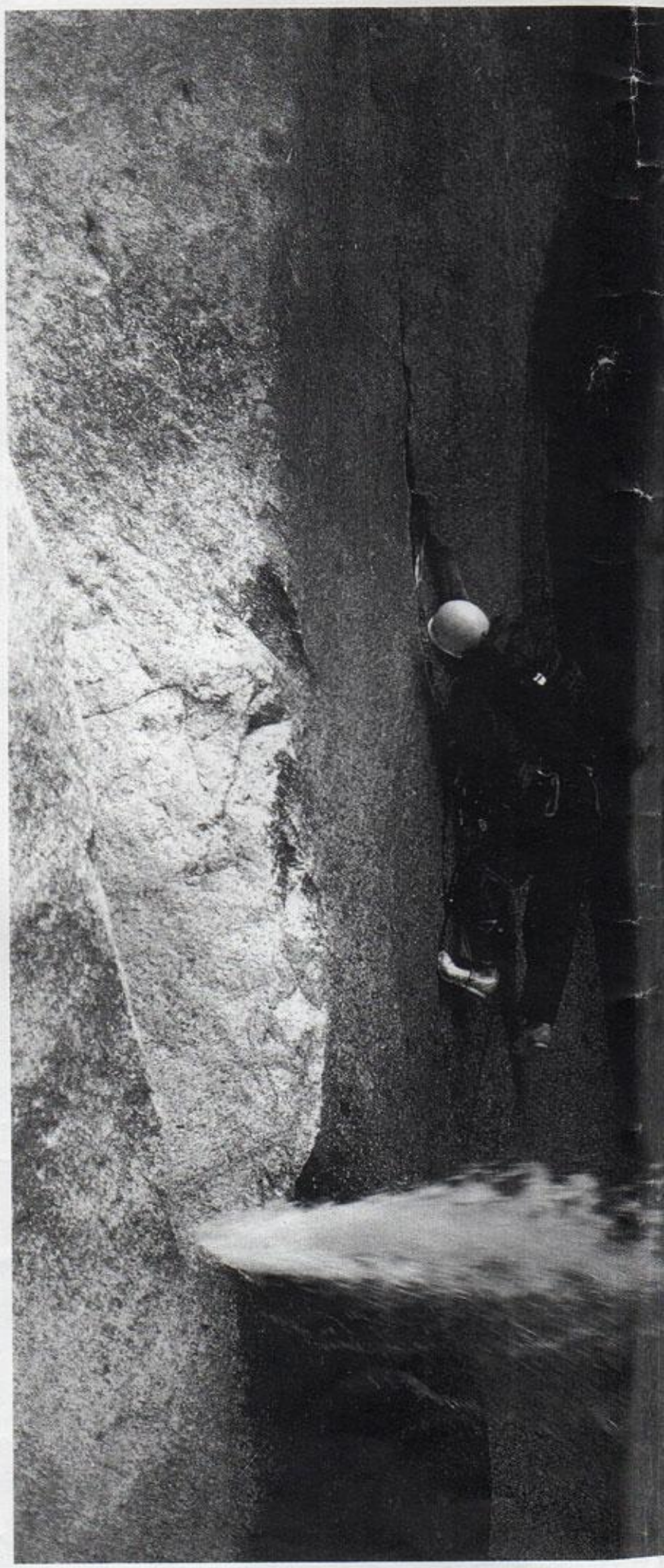
F3は深いゴルジュの底。傾斜の強いナメ滝は雪崩にみがかれ、一見とりつくしまがない。大きく三段に分かれた下段は、大きな釜の中から始まる。泳ぐにはもう寒いから、左岸を微妙なバランスでへつる。行きづまったところでラープを打って、それをつかんで水流に飛び移る。きわどいフリクション登攀。

中段、鵬翔パーティは左岸の垂壁にボルト連打し、巻いているが、ボルトはすでになくなって穴だけがポツ、ポツとあいている。水流のすぐ右にクラックがあるのでトライ。フレンズやハーケンを駆使し、困難なフリーと何回かのA0で抜ける。上段の滝を見て唸る。落ちてきた水が下部のちょっとした段差をえぐり、勢い余って斜め上に吹きあげているのだ。ここも水流の右にリスが走っており、こちらは鵬翔パーティの残置ハーケンがある。吹きあげる水の下をくぐって取付き、ハーケンの抜けたところをロックスやフレンズで補なって人工で越える。

徳沢からも大きく望まれるF4は、近くから見るとさらに威圧感がある。「げ！」とか「なんだ、なんだ」とか叫びながらも、F3でのねちっこいクライミングに神経が麻痺してしまったようで、実はまるで恐さを感じない。

トリップ状態で取付く。左壁の凹角から抜口、核心のハングへ。残置ハーケンの抜けたのなんて苦にもせず、ガシガシ打ちなおして登ってしまう。沢ヤの山田氏は、ハングを嫌って水流の中をずぶ濡れで上がってくる。気色悪いスラブをもう一ピッチやって、ついにF5をあっさり登って全て終了。

〔メモ〕 パートナーはわたべゆきお（山岳巡礼倶楽部）、山田武（渓流登高会山猫＋同人栗と栗鼠）。1985年9月14～15日。ロープ使用は計16ピッチ、使用したハーケン、ナッツ類は全て回収。登るためにはアングルハーケンを含めて数枚のハーケンと、フレンズ、ロックス等あると楽。これはウエストンリッジも同様。



下又白谷F3上段をリードする筆者